

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

向井代遺跡

— 発掘調査報告書 —

1987

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



序 文

関西国際空港建設とともに埋蔵文化財の発掘調査も、いよいよ佳境にさしかかってきた。すでに出版した調査報告書に一端が垣間みられるところであるが、ここに報告した向井代遺跡もそのひとつといえよう。

さて向井代遺跡の調査の発端は、近畿自動車道建設とともに工事用進入路の計画が本府教育委員会にもたらされたことにある。進入路計画地には数箇所の遺物散布地がすでに確認されていたため、とりあえず試掘調査をおこない、文化財の取り扱いについての判断をおこなうことにした。その結果、本調査の必要性のみとめられた箇所について、発掘調査を財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施することになったものである。

調査のくわしい結果については、本報告書に記すとおりであるが、鎌倉時代の掘立柱建物が1棟みつかったことが、おもな成果のようである。道路幅員にかぎられた狭い面積の発掘調査であったため、この掘立柱建物が単独で存在していたのか、あるいは複数の建物で集落としての景観をみせていたのかは、現在のところ不明といわざるを得ない。今回の発掘調査で掘り出された建物の性格について、いますぐには論及しがたいが、周辺の調査の進展につれ、徐々に解明していくものであろう。

いっぽう、調査地区の周辺に目を転じると、式内社の意賀美神社が隣接しており、どのような関係をもっていたかが注目されるところである。さらには、この付近一帯が鎌倉時代に九条家によって立荘された、「日根荘」にふくまれ、歴史学会ではつとに有名な、「日根野村絵図」の中世的世界の一画を構成するということが注意をひく。中世の絵図に描かれた荘園と現代にまで遺されてきた、遺跡との対比による、歴史と文化の解明は実に魅力ある課題ではなかろうか。息の長い研究を期待したい。本報告書にまちめられた調査にもとづく知見が、そうした研究の一翼をになうことを確信するものである。

1987年8月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉房康幸

序 文



関西国際空港建設に伴う各種の公共事業が数多く計画され國を初めとして公社・公団・府・市等の開発部局では各事業を空港開港時に合わせるべき予定で事業実施されている。

これら各種の公共事業が大規模に実施されると地下に埋没し保存されていた埋蔵文化財の破壊につながる恐れがあり、土木工事を実施される時は、その保存をも配慮された工事実施が求められ、開発側と保存側の十分な協議と調整を必要であり、最近では開発側の文化財に対する理解の深まりとともに計画の変更等で保存が図られる例が多くなってきたが全体の事業から見ると少なく今後さらに協議・調整を進めることが必要である。

本協会は、大阪府教育委員会が開発者側との協議の結果調査が必要と判断された遺跡を調査実施するため、近畿の各府県・府下市等の教育委員会の協力のもとに昭和60年4月に設立され、現在各地で発掘調査を実施中であります。

今回、報告いたします向井代遺跡は、泉佐野市向井代に所在しており、近畿自動車道和歌山線と空港を結ぶ空港連絡線J Cにあたり道路建設に伴う工事用道路建設に先立つ発掘調査でありますて、昭和61年12月に試掘調査を行い遺物・遺構を検出したので当該部分の発掘調査を引き続いて実施したものであります。

本遺跡の発見は、泉佐野市教育委員会がコスモポリス建設予定地の埋蔵文化財の分布調査の結果数ヶ所の遺物散布地を確認されてた。これらの地点内を中心として今回調査を行ったものであります。

調査の結果、掘立柱建物が1棟検出できさらに調査範囲外に広がっていることが判明したが、今回の調査は範囲が限られていたためその広がりは不明であった。その他、櫻井川の氾濫による堆積等を検出することができ本地域では今まで本格的な調査が行われていなかった所であり予想以上の成果を得ることが出来た。

本調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局・岸和田工事事務所・大阪府教育委員会・泉佐野市教育委員会、その他地元関係者に多大のご協力、ご支援を得たことに対して深く謝意を表します。今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導をお願い申し上げます。

昭和62年8月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野 素雄

例　　言

1. 本書は近畿自動車道和歌山線工事用道路予定地内、向井代遺跡およびその近接地の発掘調査報告書である。
2. 調査は日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 本書には、発掘調査に先立って実施した試掘調査の結果も併せ記載した。
4. 現地調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課（課長 井藤 徹）、五班（班長 岩崎二郎）、技師 富加見泰彦 岡本圭司が担当した。
5. 調査は、昭和61年12月8日から昭和62年1月31日まで試掘調査を実施し、その結果を受けて、昭和62年2月16日から同年3月31日まで本調査を実施した。
6. 調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局岸和田工事事務所、同公団大阪建設局泉佐野工事事務所、泉佐野市教育委員会および地元関係各位の御配慮を受けた。
7. 本調査では、理化学的な分析業務を（有）古環境研究所に委託し、実施した。
8. 調査及び報告書作成にあたり、大阪府教育委員会文化財保護課の他、鈴木陽一（泉佐野市教育委員会）、仮屋喜一郎（泉南市教育委員会）、橋本久和（高槻市埋蔵文化財センター）、豊田兼典、落合清茂、角森雍次郎（大阪府科学教育センター）、森川光信（意賀美神社宮司）の各氏から御指導、御教示を得た。
9. 報告書の作成については、富加見の助言を得て岡本がおこなった。
10. 本調査にあたっては、写真、実測図等の記録資料及びカラースライドを多数作成した。それらは財団法人大阪府埋蔵文化財協会で保管している。広く利用されたい。

凡 例

1. 本書に掲載した遺構図の方位はすべて、新平面直角座標の第VI座標系を基としている。
2. 本書で使用したレベル高は、すべてT.P.（東京湾標準潮位）である。
3. 本書に掲載した挿図類は、土器が1/3、石器が原寸である。なお、遺構および模式図類は統一していない。
4. 本書に記載した周辺の地形図は、国土地理院発行の土地条件図の「岸和田」（5万分の1、昭和45年）を使用した。
5. 本書に掲載した遺跡分布図は、通商産業省工学技術院地質調査所発行の地質図（5万分の1、昭和61年）を使用した。
6. 上層断面の色調、粒子、および土器の色調に関しては『新版標準土色帖』5版（日本色彩研事業株式会社）1976年9月の色版を使用し記載した。
7. 図化した土器のうち、その胎土の質により断面を以下のごとく分類・図化した。

土師質—黒ぬり 瓦質—網目トーン 須恵質・陶磁質—白ぬき
なお、黒色土器は、焼けられている部分を網目トーンにより表現した。
8. 遺構および遺構番号に関して当協会独自の呼称をすべての遺構にふってあるが、報告書作成にあたり、再編成し、土塁・溝・柱穴等の呼称に変更し、遺構番号も、本文に記述したものにしおった。

目 次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経過	1
第1節 調査に至る経過	富加見 1
第2節 試掘調査	富加見 2
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	岡本 6
第2節 歴史的環境	富加見 6
第3章 調査の方法	岡本 9
第4章 調査成果	11
第1節 基本層序	岡本 11
第2節 A地区・包含層出土遺物	岡本 11
第3節 A地区・遺構と遺物	岡本 17
第4節 B地区の調査	富加見 23
第5章 まとめ	岡本 24

挿図目次

第1図 地形図	1
第2図 周辺の遺跡群	2
第3図 トレンチ出土石器	2
第4図 試掘トレンチ設定図	3
第5図 周辺の地形	6
第6図 周辺の遺構	8
第7図 地区割り図	10
第8図 A地区第II層出土遺物	11

第9図 A地区第III層出土遺物	12
第10図 各地区土層断面図	13
第11図 A地区全体図	15
第12図 A地区第IV層出土遺物	16
第13図 A地区第V層出土遺物	17
第14図 土塙1遺物出土状況	18
第15図 土塙1出土遺物	18
第16図 掘立柱建物跡	19
第17図 B地区全体図	21
第18図 遺構内出土遺物	23

表 目 次

第1表 遺物出土トレンチ一覧表	5
-----------------	---

図 版 目 次

図版一 a A地区より西方を望む

b A地区全景（北東から）

図版二 a 掘立柱建物跡（南から）

b 掘立柱建物跡（東から）

図版三 a 東方よりB地区を望む

b B地区全景（西から）

図版四 a トレンチ出土遺物

b II層出土遺物

c III層出土遺物

d IV層出土中国製遺物

図版五 a IV層出土遺物

b 遺構内出土遺物

c 石鏡

d 古銭

e V層出土遺物

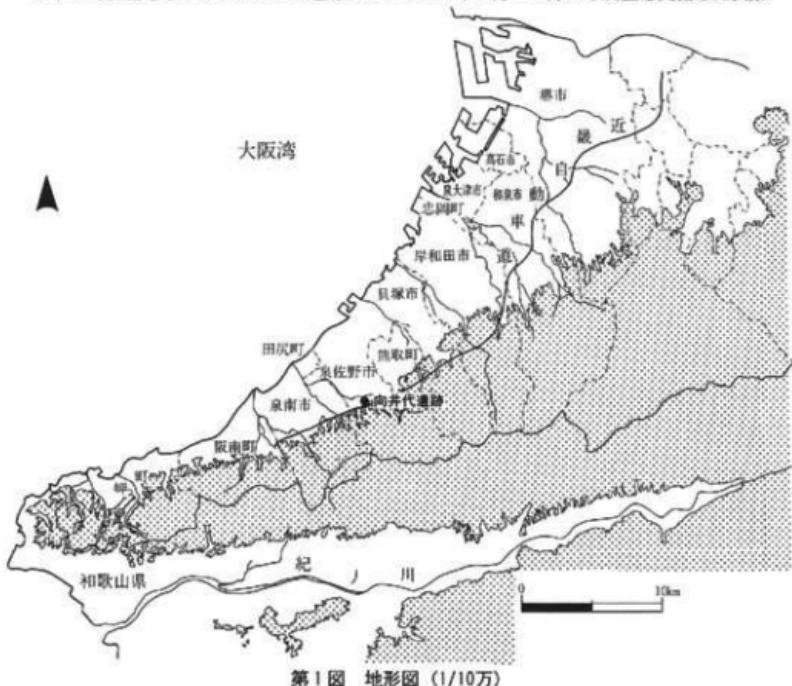
第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

向井代遺跡は、泉佐野市上之郷に所在し、向井池の眼下に広がる河岸段丘上に立地しており、中世の日根野荘域にあたる。

発掘調査は、関西国際空港建設に伴う各種公共事業の一つである近畿自動車道和歌山線建設のための工事用進入路予定地内には向井池、向井代、川原、棚原等の遺跡が存在するため、まず1986年12月～1987年1月にかけて試掘調査を全線3kmにわたって行なった。

その結果、向井代遺跡からは中世～近世にかけての遺物と水田の畦畔とみられる遺構が認められた。棚原遺跡については遺物等の出土はなかったものの土地の伝承では山城の存在する可能性もあるため、この2遺跡について1987年2月～3月に本調査を実施した次第



第2節 試掘調査

試掘調査は和泉山脈の裾部に展開する7遺跡を中心として泉佐野市土丸～上之郷にかけての3kmにわたって実施した。

調査は便宜的に土丸、日根野、上野郷の3地に区分した。方針として遺構を検出した場合、検出面でとめることにし、そうでない場合は無遺物層あるいは地山面まで掘り下げる

ことにした。以下概略を各地区について記すこととする。

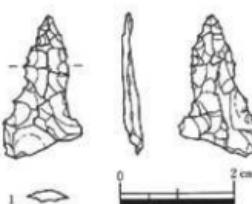
土丸地区（1～6トレンチ）樅井川の支流である稻倉川の右岸にあたり、近くには日根野荘開発の基になったとされる大井闇がある。僅かに土師器片等が出土したが、遺構については検出できなかった。

日根野地区（7～12トレンチ）延喜式神名帳にみられる日根神社の東方にあたる。遺物は縄文時代石器と15世紀前後の瓦器・土師器片が僅かに出土し、遺構は検出されていない。

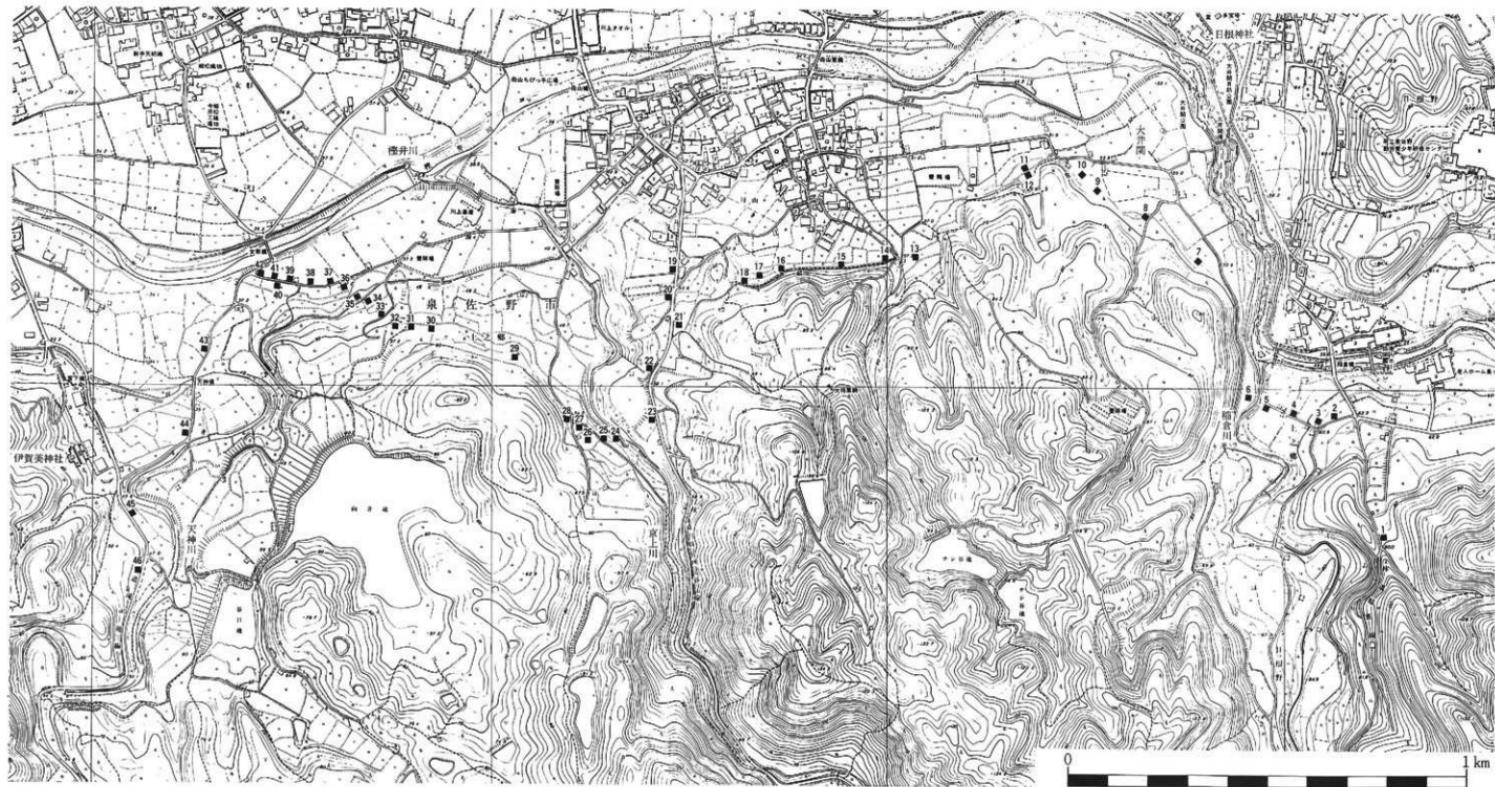
上之郷地区（13～46トレンチ）意賀美神社北側の段丘からは他の地区に比較して、遺物の出土量が多い。さらに土地の人聞くところでは山城を想起させるような字名の地点もあり、三地区の中では遺構の存在する可能性が高い地区である。



第2図 周辺の遺跡群 (1/2万)



第3図 トレンチ出土石器 (1/1)



第4図 試掘トレンチ設定図（1/1万）

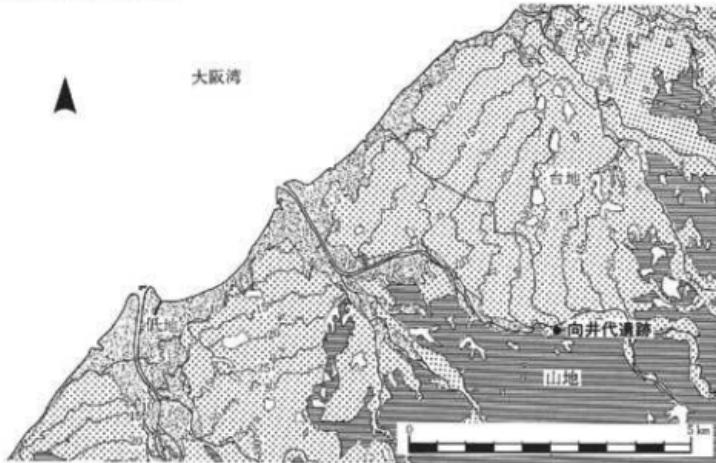
トレンチ NO.	所在地	時代							備 考
		縄文	弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	江戸	
1	土丸								
2	〃				○				土師器
3	〃								
4	〃								
5	〃				○				土師器
6	〃								
7	日根野				○			○	瓦器、瓦、陶器
8	上之郷							○	瓦
9	〃	○	○	○	○			○	土師器、須恵器、瓦器、石器
10	〃				○	○			土師器、瓦器、陶器
11	〃				○	○			土師器、瓦器、磁器、染付
12	〃					○			陶器
13	〃								
14	〃								
15	〃								
16	〃								
17	〃					○			陶器
18	〃								
19	〃				○				土師器、瓦器
20	〃				○			○	土師器、瓦器、瓦
21	〃				○			○	土師器、陶器
22	〃								
23	〃				○				土師器
24	〃								
25	〃								
26	〃								
27	〃						○		土師器
28	〃								
29	〃								
30	〃								
31	〃								
32	〃					○			瓦、陶器
33	〃				○				瓦器
34	〃								
35	〃								
36	〃					○			土師器、染付
37	〃								
38	〃								
39	〃					○			染付
40	〃								
41	〃								
42	〃								
43	〃					○			土師器、瓦器、瓦質土器
44	〃								
45	〃						○		土師器、瓦質土器
46	〃								

第1表 遺物出土トレンチ一覧表

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

向井代遺跡は、泉佐野市上之郷地区に所在する。泉佐野市は大阪府の南部に位置し、南は樅井川、北は見出川に挟まれ西に大阪湾を臨む。泉州の屋根である和泉山脈は東から南にかけて標高500～600mの峰々を頂く。市域は北西から南東へ細長い形を呈し、面積は50.82km²、人口約9.1万人である。和泉山脈から派生した枝状に延びる丘陵段丘部、および山間部が大半を占め、沖積低地は余り発達していない。又、雨量の少ないと相まって丘陵・段丘部の縁辺を利用した溜池が発達する。見出川・樅井川・佐野川等の大小の河川の大半は、その源流を和泉山脈に求められ、段丘部を激しく開折して、時には大きく屈曲しながら大阪湾へ流れ込む。向井代遺跡は、樅井川中流域左岸の丘陵、および段丘部の田園地帯に位置する。



第5図 周辺の地形 (1/10万)

第2節 歴史的環境

泉佐野市は府南部に位置し、北西は大阪湾を臨み、南東には和泉山脈をひかけた地理的な条件を持っている。河川は市域を北から貝塚市境を流れる見出川、中央部を流れる佐野

川、泉南市境を流れる樺井川があり、いずれも和泉山脈にその源を発し、北流することによって大阪湾に注いでいる。

遺跡分布の状況を見ればおおむねこの3河川の周辺に存在しているといえよう。旧石器時代の遺跡については泉南市域の滑瀬遺跡から有茎尖頭器、ナイフ形石器が出土したのをはじめ、玉田山遺跡等でも発見されているが、具体的な様相を述べるまでには至っていない。

縄文時代になると晩期の段階で樺井川流域の低位段丘面から沖積段丘面にかけて三軒屋遺跡・船岡山遺跡が出現する。

弥生時代では前記の三軒屋遺跡・船岡遺跡を中心として、樺井川旧河道、低位段丘面が開発されているようである。中期になると遺跡の数も増加し、低位段丘面に存在するものと新たに新家オドリ山遺跡・向井山遺跡のように丘陵に位置するものに分けられる。

後期になると、丘陵部の遺跡は認められず低地のものだけとなっている。古墳時代の集落も沖積段丘の縁辺部に立地しているようであるが、詳細は不明である。その他、海岸線に沿った沖積段丘面には松原遺跡・羽倉崎遺跡・湊遺跡等が認められ、立地から推測して製塩・漁業と深くかかわった遺跡と考えられる。古墳群は樺井川左岸の丘陵上にフキアゲ山東古墳群・新家古墳群・兎田古墳群が存在する。現在確認されている中で最も古いのはフキアゲ山東古墳群で5世紀末に出現している。大規模古墳は存在せず、政治的基盤は弱かったと考えられる。しかし奈良時代になると、この地には賀美郷に押興寺、呼勝郷に海会寺の2寺院が建立され、周辺地域より優位性がうかがわれるところである。さらに、樺井川の右岸には比較的整った条里制も認められ、二ノ坪、三ノ坪、六ノ坪、七ノ坪、十ノ坪、十二ノ坪といった小字名が残っているようである。平安時代には光平寺・林昌寺・仏性寺・檀波羅密寺等が次々と建立されるようになり、集落の数は少ないが北野・渋各遺跡の存在が知られている。中世になるとこの地は九条家領莊園として立莊されるいわゆる日根野莊である。荒野の開発・耕地の拡大は九条家自らが指導し、寄進地系莊園の多かった九条家莊園の中にあっては特異な存在であったが、戦国期には莊園主九条家、守護・根来衆の諸権力の錯綜する地域となつたようである。

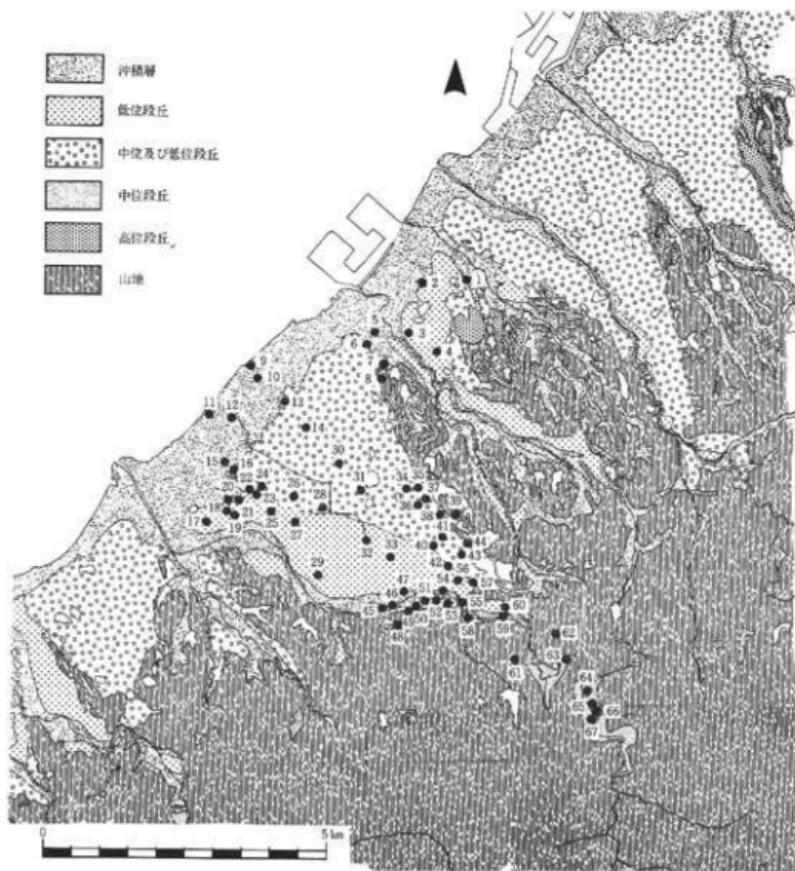
参考文献

『万里遺跡発掘調査報告書』 1978年 泉南市教育委員会

泉佐野市埋蔵文化財調査概要報告Ⅴ 1985年 泉佐野市教育委員会

泉佐野市埋蔵文化財調査概要報告VI 1986年 泉佐野市教育委員会

『和泉国日根莊現地調査報告』 1986年 東京学芸大学日本中世史ゼミ



1 日田遺跡	15 船岡山遺跡	29 三軒屋遺跡	43 北之瀬遺跡	57 宅田遺跡
2 露山遺跡	16 四本楓寺(跡)	30 長瀬遺跡	44 市森遺跡	58 滝ノ山遺跡
3 上瓦屋遺跡	17 西井ノ山遺跡	31 舟越遺跡	45 向井代遺跡	59 土丸南遺跡
4 山出遺跡	18 稲原遺跡	32 郷ノ芝遺跡	46 上之瀬生神	60 土丸遺跡
5 遠遺跡	19 沢井城跡	33 日根野遺跡	47 枕場遺跡	61 鶴倉池北方遺跡
6 佐野王子跡	20 船岡山南遺跡	34 中嶋遺跡	48 向井池遺跡	62 土丸城跡
7 植波羅密守跡	21 遠ノ瀬遺跡	35 国口遺跡	49 球原遺跡	63 下大木遺跡
8 植波羅遺跡	22 四ノ崎遺跡	36 小坂古墳	50 御山近後墓地	64 大木遺跡
9 松原遺跡	23 中呂蒲遺跡	37 十二谷遺跡	51 母山遺跡	65 中大木遺跡
10 中間遺跡	24 庄ノ下遺跡	38 丁田遺跡	52 向井山遺跡	66 西光寺遺跡
11 羽倉崎遺跡	25 鴨日遺跡	39 新池反道跡	53 錦塚古墳	67 花成寺跡
12 羽倉崎東遺跡	26 城ノ塚古墳	40 宮ノ前遺跡	54 川原遺跡	
13 米良遺跡	27 ダイジヨウ寺跡	41 大坪遺跡	55 西ノ上遺跡	
14 安松遺跡	28 桂興寺跡	42 野々宮遺跡	56 八王寺遺跡	

第6図 周辺の遺跡 (1/1万)

第3章 調査の方法

調査は、試掘・本調査に分けておこなった。

調査の地区割りは、新平面直角座標の第VI座標系を使用し遺跡の位置を表示した。

地区割りの呼称は、新版2500分の1の大阪府地域計画図（地形図）（以下、地域計画地形図と略称する）の縦軸-X軸・横軸-Y軸（縦軸は座標北を示す）を使用し、地域計画地形図を12等分している500×500mの区画をA～Lで呼称し（第7図①）、この500m区画をさらに25等分して100×100mの区画を作成し、01～25までの数字で示す（第7図②）。この100m区画を更に縦横25分割（625）等分し、4×4mの区画を作り（第7図③）、縦方向（X軸）を先に、横方向（Y軸）を後にして、行列を大文字のアルファベットで呼称・表記する（第7図④）。今回の調査対象地は、地域計画地形図の大B-3-14にあたる。

X、Y座標軸設定の割付作業は、測量会社に委託し、4級基準点をもとに設定した。

本調査において調査地が大きく2つに分かれたため、意賀美神社東側の調査区をA地区、京上川左岸の調査地をB地区と呼称した。なお、B地区は1～5のトレントを設定し調査した。

掘削方法は、人力掘削によったが、A地区の現在耕作土および市道はバックホーにより除去した。

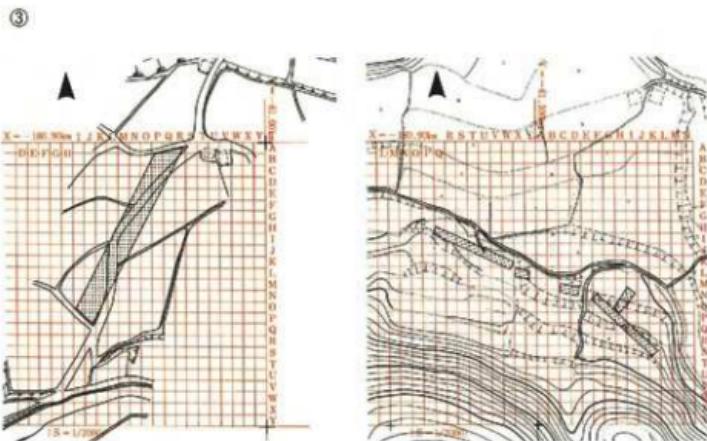
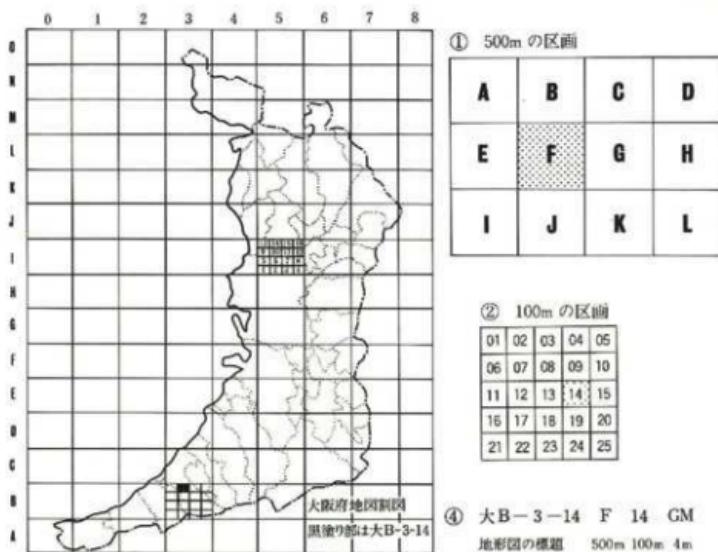
調査は、表土除去の後、各層の上面で遺構検出をおこなった。最後に地山確認の掘削をおこなった。遺跡・遺構には、隨時土層観察用の畦を設定した。

平面図の実測は、4×4mの方区画の地区割りの交点杭から位置関係、方位の決定をおこない、縮尺は1/20を基調とした。

土層断面図の実測は平面図と対応させるべく1/20を基調とした。

写真撮影は、35mm一眼レフ小型カメラ・4×5in.大型カメラを併用して撮影した。フィルムはISO100・400のリバーサルとモノクロームを使用した。又、5段2連の足場を設置し撮影の補助とした。

遺物は、地区（4m区画）・層位・取り上げた日ごとに分類し、洗浄した後、以上のことを註記した。接合・復元をおこなった後、代表的な遺物を選別し、実測・写真撮影をおこない、本報告書に掲載した。



第7図 地区割り図

第4章 調査成果

第1節 基本層序

今回調査区を設定したA地区・B地区は距離にして約1.5km離れている。地勢もA地区が段丘を利用した段々畑、B地区が丘陵麓にある蜜柑園のため層序も著しく異なる。よってA地区・B地区に分け、基本層序を記載する。

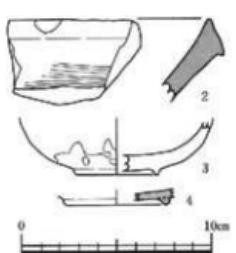
A地区的層序は大きく5層に分層される。

I層は現在の耕作土である。この耕作土をはずすと、II層の鉄分が多く含む黄褐色～灰黄色系のシルト質の土が現れた。厚みは10～30cmを測る。細分層すると、厚さ数cmの層が何層かに分かれしており、田畑の床が数回作り替えられたことがうかがえた。III層は明灰黄色系の粘質シルト質の土が30～60cmの厚みをもって堆積する。IV層は灰黄色～橙色系の砂・マンガンを多く含むシルト質の土である。厚みは10～30cmを測る。V層は厚さ10cm程で調査区北部を中心に堆積する。

調査区北西部は田畑の形成に伴ない一部層を乱されている。しかし、全体に整合的な堆積が観察され、マンガン・鉄分を含むことから、旧来より田畑であったと考えられる。

B地区は、丘陵の麓をカット及び土盛りして階段状に平坦地を作り蜜柑園となっている。そのため包含層の厚み、および層序は一様でない。しかし、マンガン・鉄分を含む整合的な面がいくつか観察されたことと、出土する遺物も近世以降のものであり、おそらく近世以降、この地に開発の手が加えられたと考えられる。

第2節 A地区・包含層出土遺物



第I層

I層は現在耕作土、および休耕作土である。表面採集遺物、出土遺物はなかった。

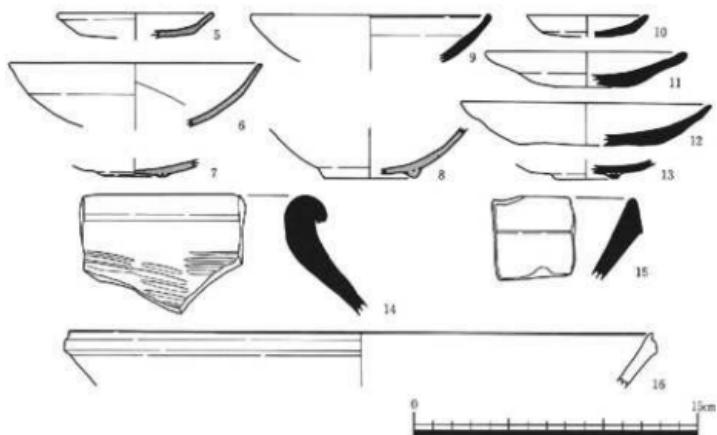
第II層

II層から瓦質鉢、瓦器碗、陶磁器瓦が出土した。

2は瓦質の鉢である。内面に横方向のハケ目が入る。

3は唐津焼の碗である。内面と、外面高台際まで5

第8図 A地区第II層出土遺物(1/3) Y4/3(暗オリーブ)の釉がかかる。三ヶ月高台である。



第9図 A地区第III層出土遺物(1/3)

4は瓦器碗高台部である。磨耗が激しい。高台径は5.1cmを測る。

第III層

III層から瓦器碗、瓦器皿、瓦質甕、土師質甕、土師質甕、須恵質鉢が出土した。

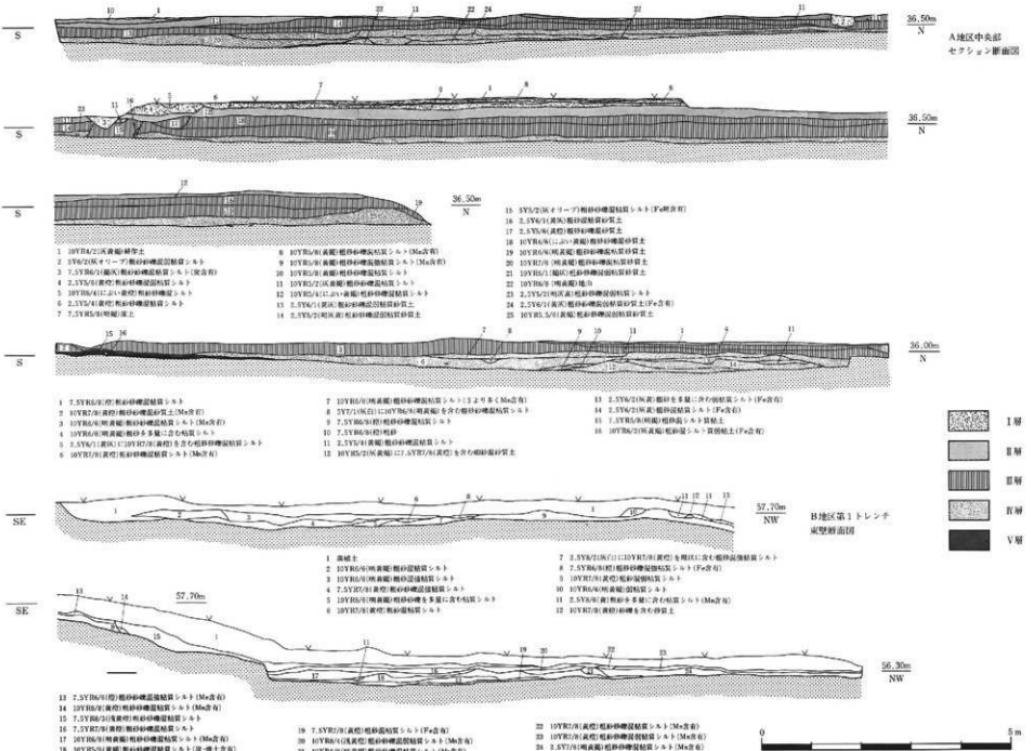
5は瓦器皿である。口径8.3cmを測る。内面にナデ調整を施す。6～8は瓦器碗である。全体に磨耗が激しい。6は口径13.4cmを測る。内面は横方向のナデが入る。7・8は高台径48.0cmを測る。

9～12は土師質皿である。磨耗が激しい。内面から口縁部にかけヨコナデで調整が施される。10は口径6.4cmを測る。胎土に赤色粒を含む。11は口径10.6cmを測る。9が橙色系の色調を呈すが、他は灰白色を呈する。13は碗高台部である。高台径は3.3cmを測る。磨耗が激しい。色調は橙色を呈すが、炭素の吸着しなかった瓦器と考えられる。胎土はやや粗い。

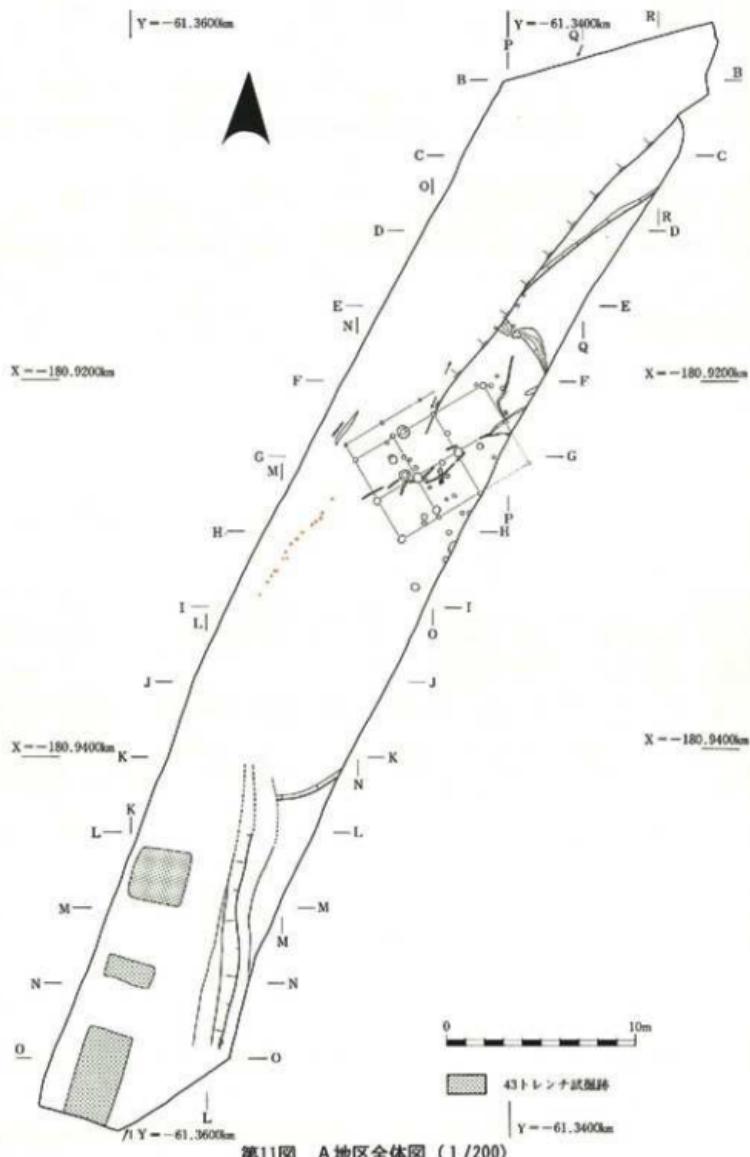
14は甕の口縁部である。叩き(2本/1cm)が外面に入る。内面はナデしている。口縁部は折り曲げられる。内面には煤が付着する。色調は外面7.5YR8/6(浅黄橙)、内面2.5Y8/4(浅黄)、断面5Y7/1(灰白)を呈す。3mm以下の白色、褐色粒を多量に含む。

15は土師質練鉢口縁部である。磨耗が激しい。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を多量に含む。色調は淡黄色を呈す。

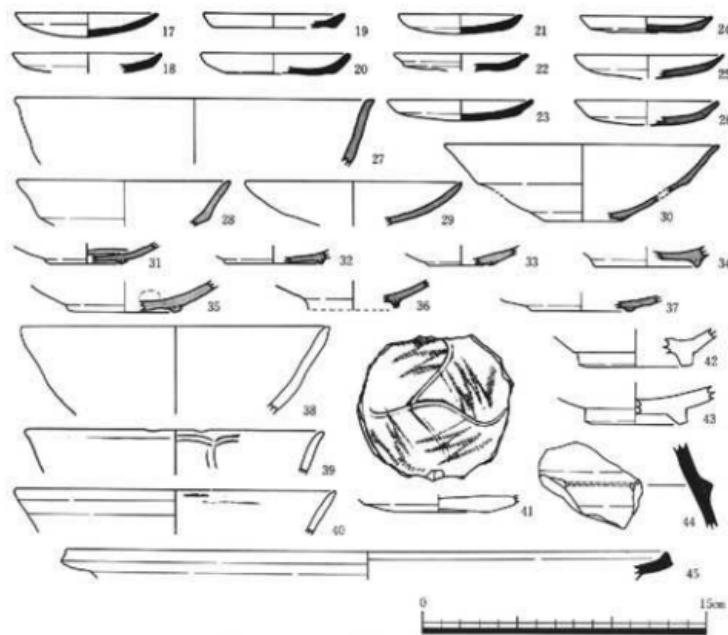
16は須恵質の鉢である。口径は30.6cmを測る。内外面に横方向のナデが施される。口



第10圖 各地區土層斷面圖 (1/80)



第11図 A地区全体図 (1/200)



第12図 A地区第IV層出土遺物(1/3)

緑部の沈線は砂粒の動いた跡であろう。胎土に1mm以下の砂粒を少量含む。

第IV層

IV層からは、瓦器碗、瓦器皿、瓦質甕、瓦質鉢、土師質皿、土師質羽釜、中国製青磁・白磁、瓦が出土した。

17~23は土師質皿である。口径は6.5cm~7.9cmである。20は口縁部をつまみ上げているが、他は口縁部にヨコナデを施すことにより屈曲させている。17は屈曲が弱く、19は強い。色調は17・18が浅黄色系を呈す。19~23は橙色系の色調を呈す。全体に磨耗が激しい。胎土は粗いものが多く、褐色粒を多量に含む。

24~26は瓦器皿である。24は口径7.0cmを測る。口縁部の屈曲が鋭い。外面に鉄分が付着する。25は口径7.8cmを測る。口縁部の屈曲は弱い。27は瓦質の鉢であろう。内外面をヨコナデにて仕上げる。28~37は瓦器碗である。28はやや小型で口径11.2cmを割る。体部中位で強く屈曲する。29は体部が丸みを持つ。2mm以下の褐色粒を少し含む。ナデで

整形する。30は口径14.5cm、器高4.1cmを測る。磨耗が激しく調整は不明である。31～33・36・37の高台の貼り付け方は粗雑である。高台径は3.5cm～5.3cmを測る。34・35の高台はしっかりしており、高台径は5.6cm、5.4cmと幅が広い。炭素の吸着も良い。

38～40は青磁碗である。38は内外面とも無文である。口径は16.1cmを測る。残存部全面に施釉されている。胎土は緻密で0.1mm以下の黒色粒を若干含む。焼成は良い。釉調は10Y6/2（オリーブ灰）を呈す。39は口径15.4cmを測る。内面を2本の沈線で分割するものである。口縁は輪花になる。残存部全体に施釉されており、釉調は7.5G Y7/1（明緑灰）を呈す。きめの粗い貫入が入る。胎土は緻密である。40は口径16.7cmを測る。口縁部内面に2条の沈線が入る。釉調は外面が10Y6/2（オリーブ灰）、内面が7.5Y6/2（灰オリーブ）を呈す。残存部全面に施釉され細かい貫入が入る。

41は青磁の皿である。内面にヘラによる片切り彫りと、クシ状工具によるジクザグ文が施される。胎土は緻密で焼成は良い。底部は釉をかきとっている。釉調は内面は10Y7/2（灰白）～10YR6.5/2（オリーブ灰）、外面は10Y7/2（灰白）～10Y6/2（オリーブ灰）を呈す。口縁部は残存せず、底部の縁辺を数ヶ所うちかいた痕跡がある。

42・43は白磁碗である。内面のみに釉がかかる。42は内面を蛇の目状に釉をかきとる。

44・45は土師質羽釜である。胎土は2mm大の粗砂を多く含みやや粗い。44の鉢は退化したもののが貼り付けてある。色調は浅黄色系を呈す。

第V層

V層からは黒色土器碗46出土した。内外面とも黒く、口縁部内面に沈線が入る。口径13.6cmを測る。内面は横方向の粗いヘラミガキ、およびナデにより調整され、外面は横方向の粗なヘラミガキ

第13図 A地区第V層出土遺物(1/3) キ、縦方向のヘラケズリにより調整される。口縁部にはヨコナデが入る。胎土には1mm以下の白色・黒色・金色粒が少量入る。

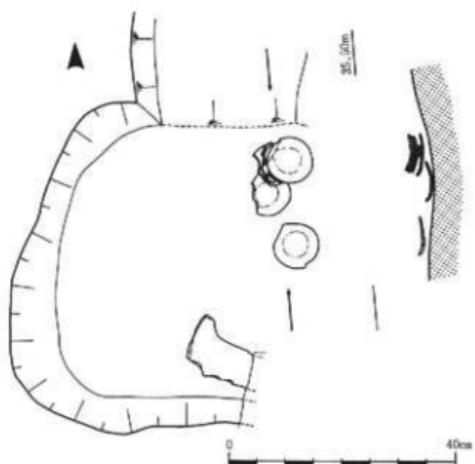
第3節 A地区・遺構と遺物

柱穴、溝、土塙等を検出した。遺構の大半が第V層上面の調査区北東部に集中する。

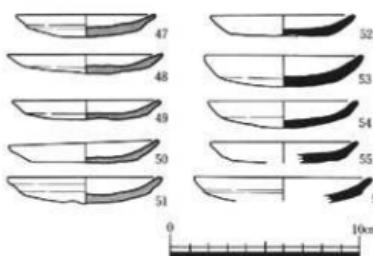
土塙1

深さは5.8cmを測る。一部調査区外に入る。土塙内より十数枚の瓦器皿、土師質皿が出土した。うち5枚はほぼかきなった状態で検出された。埋土は灰褐色の粗砂砂礫混シルト





第14図 土塙1出土状況(1/10)



第15図 土塙1出土遺物(1/3)

であるが、中央部が灰色の粗砂混じりの強粘質シルトに変わっていることから、柱穴の可能性も考えられる。

遺物

瓦器皿、土師質皿とともに47・48・52・53の様に底が丸く内凹するものと、45～51・54・55の様に口縁部とヨコナデにより、屈曲させるものがある。口縁部を屈曲させるもののうち、49・50・54はナデが弱く、51・55・56はナデが強

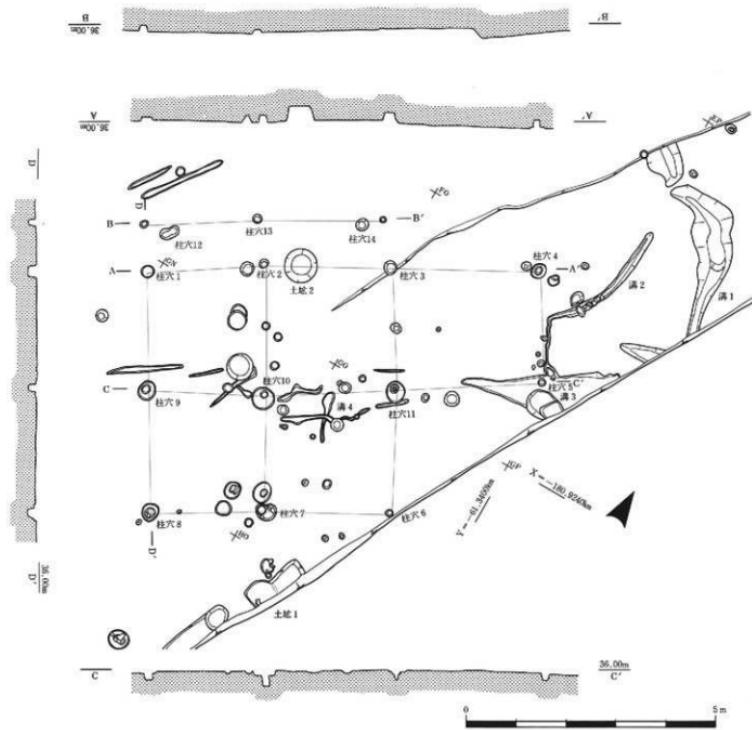
い。瓦器の色調は磨耗のため、灰白色を呈すものが多いが、もとは残りの良い51のように緑灰色を呈したと思われる。土師質の皿は52・53が淡黄色、54が橙色、55・56が浅黄色を呈す。胎土は全体に粗く赤褐色粒など、2 mm大の砂粒を含む。口径は、47から順にしるすと、7.3cm、8.2cm、7.7cm、8.0

cm、8.2cm、7.6cm、8.4cm、7.8cm、7.7cm、9.4cmとなる。

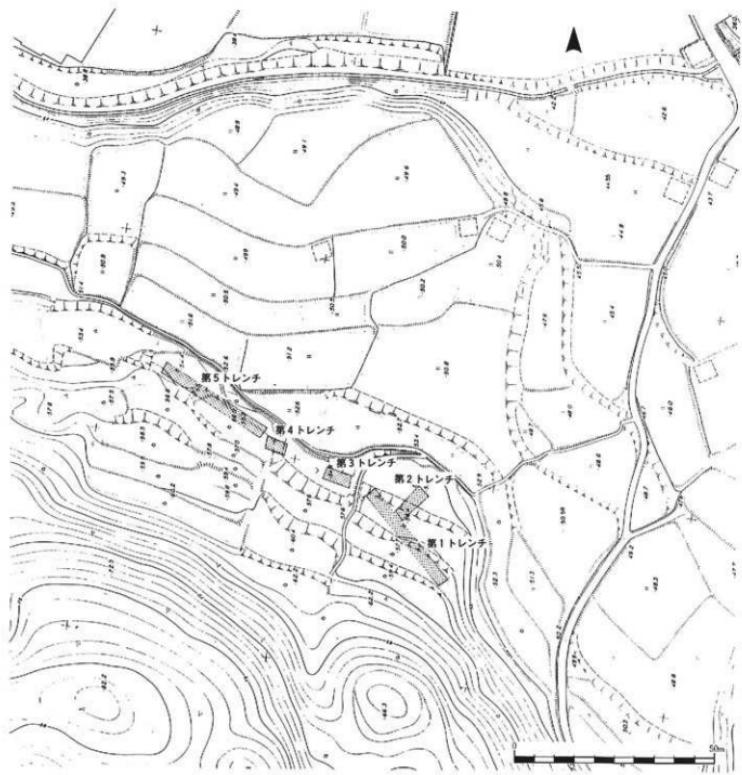
掘立柱建物

V層上面で検出された柱穴群により桁行3間・梁間2間の総柱の建築物を想定した。

桁行は1間、2.28m～2.96m、梁間は1間、2.28m～2.60mを測る。主軸はほぼN-57.5°-Eをとる。柱穴の深さは9.5cm～33.1cmである。埋土に炭・マンガン・鉄片を含む灰黄褐色のシルトが入ることが多いが、一部、鉄分を多く含む黄褐色系をなすものもあり、灰黄褐色系のものより土質はかたい。柱穴1には根石が入っていた。なお、柱穴12～14は庇になる可能性が考えられる。柱穴8より土師質皿が、柱穴10より古銭（「元通宝」）が出土している。

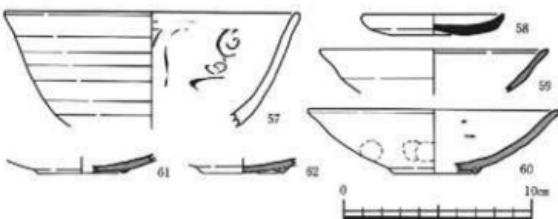


第16図 据立柱建物跡 (1/80)



第17図 B地区全体図 (1/2000)

遺物
58は柱穴8の土師質皿である。内外面をナデている。外面の底部には指圧痕がある。色調は2.5Y8/3（淡黄）を呈す。



第18図 遺構内出土遺物(1/3)

溝3

溝3は検出長3.2m、最大幅92cmを測る。埋土に10YR7/1（灰白）の細砂混粘質シルトが入る。柱穴5を切っており掘立柱建物より後出すると考えられる。

遺物

60は瓦器椀で口径13.4cm、高台径4.2cmを測る。口縁部をヨコナデし、内面に暗文を施す。

畦

調査区の南端に幅1m、高さ30cm、長さ7mの南北に走る畦を検出した。軸はN-13.5°-Eをとる。埋土内より瓦器の高台部61・62が出土した。

土塙2

直径66cm、深さ29.3cmを測る土塙である。埋土には炭やマンガンを含む粗砂砂礫混シルトが入る。壁のまわりに鉄分が付着していたことや、炭が多量に入ることから、桶等が付設されていた可能性がある。

その他の遺構

溝4から中国製の青磁57が出土している。内面を2本の沈線が分割し、その中に飛雲文を片切り彫りする。釉調は7.5Y6/3～5Y6/4（オリーブ黄）を呈す。細かい貯入が入る。II層上面の杭跡より瓦器椀59が1点出土した。

第4節 B地区の調査（第17図、図版3）

丘陵緩斜面に5本のトレンチを設定し調査をおこなった。しかしながら、明確な遺構の検出には至らなかった。断面観察・出土した遺物から判断して近世以降に開墾を受けているようである。

現時点では「山城」等の存在を積極的に認める材料は検出できなかった。

第5章 まとめ

今回の調査で、1棟の掘立柱建物跡と溝・土塙等が検出・確認されたことは第4章で報告した。以下、A地区の調査にしばり、まとめとしてその性格と展望を考えたい。

各層序の堆積した年代であるが、IV層以外は出土遺物は非常に少なく、また、各層序とも、瓦器、土筋器の細片が大部分を占め、その年代をきめることは非常に難しい。

この状況の中から時代の下限を画すると考えられる遺物を各々取り上げると、II層は伊万里焼で近世・近代、III層は土師質の甕・鉢等の日常雑器で15世紀末葉に位置することが考えられる。しかし、これらの時代の堆積であることを適確にあらわしているかはわからない。

IV層は遺構が検出された北東部を中心に比較的の遺物の量が豊富であった。出土遺物は瓦器、土師器が中心をなすが、これらに混じり数片の中国製陶磁器も検出されたことは報告の通りである。瓦器椀は、高台のしっかりしたものも若干見られるが、大半は、底部に粗雑な造りの高台が貼り付けられ、全体に調整の粗いもので、13世紀後半から14世紀前半に使用されたと考えるものである。

V層上面から検出された遺構の埋土に含まれる遺物も、同時期と考えられる。

V層から出土したものは、黒色土器が1点検出されただけで、V層の堆積年代をきめかねる。

掘立柱建物の位置は、東側の丘陵部から迫り出したところに当たり、まわりの地形に比べ、若干標高が高い。今回、掘立柱建物跡は3間×2間の1棟しか検出されなかつたが、建物の西側が未調査区に当たるため、さらに間取りが大きくなることや、別の建物が存在することは充分考えられる。

この建物の約550m南東に式内社である意賀美神社が存在する。今後、この遺跡を考えるにあたり、その関係を留意する必要があろう。

上之郷地区の中世前期の景観をあらわすものとして、正和五（1316）年に作成されたと考えられている有名な日根野村絵図や日根野村近隣絵図が存在する。しかし当地域は、日根野村近隣絵図の遠近間に乏しい概略図の中に、字名が、數軒の家屋と荒地・耕作地と共に描かれているのみである。調査成果を少しづつ積みかさねていくことにより、これら絵図のイメージをより具体化していくことができるであろう。

図 版



A地区より西方を望む



A地区全景（北東から）



掘立柱建物跡（南から）



掘立柱建物跡（東から）



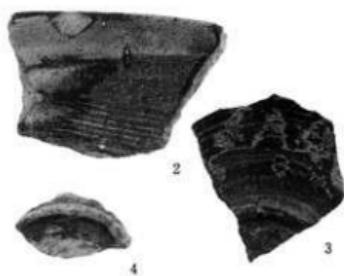
東方よりB地区を望む



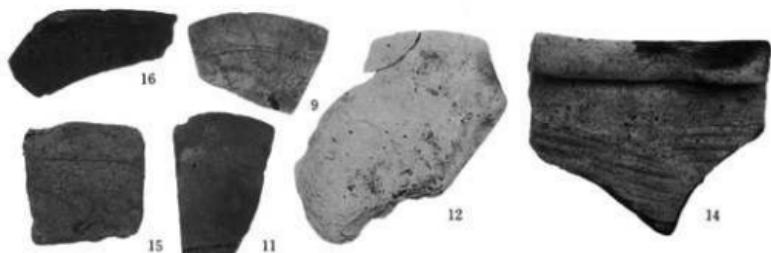
B地区全景（西から）



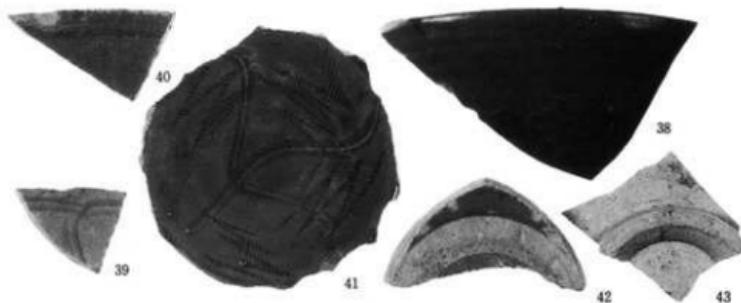
トレンチ出土遺物



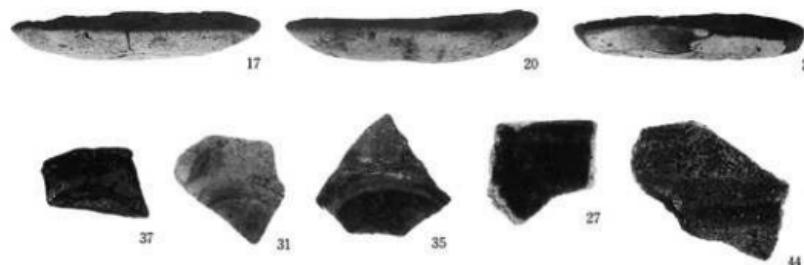
Ⅱ層出土遺物



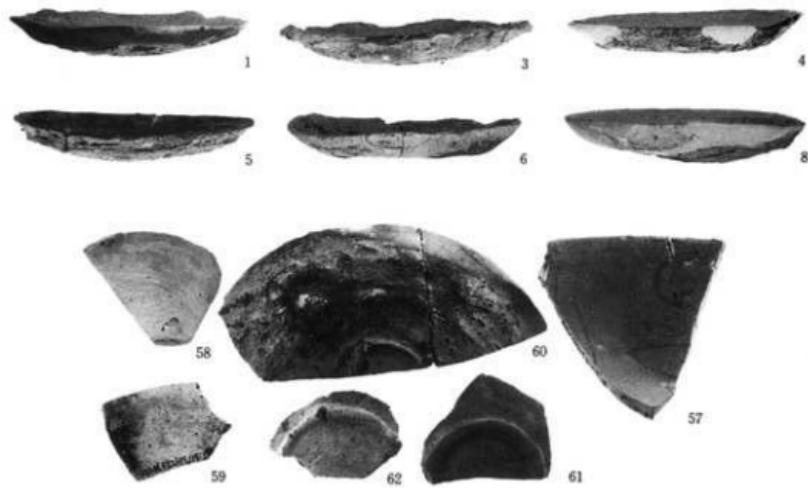
Ⅲ層出土遺物



Ⅳ層出土中国製造物



IV層出土遺物



遺構内出土遺物



石鏃

古錢

V層出土遺物

(財)大阪府埋蔵文化財協会報告第14号

向井代遺跡発掘調査報告書

昭和62年 8月30日

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪市東区谷町2丁目36番地 大手前ウサミビル5F

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所